

# 項羽

世阿弥作

前

ワキ 草刈男

シテ 渡守

後

ワキ 前に同じ

シテ 楚の項羽

ツレ 虞美人

地は 唐土

季は 七月

ワキ次第

「詠め暮らして花にまた。く。宿かる草を尋ねん。

詞

「是は烏江の野辺の草刈にて候。今日も草を刈り唯  
今家路に帰り候。

下歌

「野辺は錦の小萩原。刈萱交じる烏江野に。

上歌

「草刈る男心なく。く。花を刈るとや思草。家  
づとなれば色々の。草花の数を刈り持ちて。帰れ  
ば跡は秋暮れて。枯野にすだく虫の音も。花を惜  
しむか心あれ。く。

詞

「便船を待ち向へ越さうずるにて候。

シテサシ

「蒼苔路滑にして僧寺に帰り。紅葉声乾いて牡鹿鳴  
くなる夕ま暮。心も澄める面白さよ。

一声

「秋毎に。野分を船の追風にて。

地

「萩の帆かくる露の玉。

ワキ詞

「なふく其船に乗らうずるにて候。

シテ

「あう召され候へ。さて船賃は候。

ワキ

「我等如きの者の船賃参らせたる事はなく候。

シテ「船賃なくは此舟には叶ひ候ふまじ。

ワキ「さらば上の瀬へ廻らうずるにて候。

シテ「なふく道理は申しつ船に召され候へ。

ワキ「乗りおくれじと草刈は。もとの渚に立ち寄れば。

シテ「とく乗り給へとさし寄する。

地「露刈り込めて秋草のく。葉毎に影宿る。月を

や船に乗せつらん。天の川。たな渡りして七夕の。

たな渡りして七夕の。年に一夜は心せよ。秋風吹

けば波の音。湊に近き海士小船。水音なしに行く

船の。水馴棹をさうよや。水馴棹をさうよ。

シテ詞「船が着いて候ふ御上り候へ。

ワキ詞「御船恐れて候。

シテ「さて船賃は候。

ワキ「又船賃と仰せられ候ふよ。其為めにこそ向ひにて

申し定めて候ふに。何とて聊爾なる事をば承り候

ふぞ。

シテ「いや船賃と申せばとて。別の子細にても候はゞこそ。それ程多き草花をなど一本賜はり候はぬぞ。

ワキ「あら優しや。何れにても召され候へ。

シテ「さらば此花を賜はらうずるにて候。

ワキ「不思議やな是程多き草花の中に。何とて其花をば撰つて召され候ふぞ。

シテ「さん候是は美人草と申して。故有る花にて候。

ワキ「あら面白や美人草とは。何と申したる謂にて候ふ

ぞ。

シテ「是は項羽の後虞氏と申せし人の。身を投げ空しくなり給ひしを。取り上げ土中に築き込め候へば。

其塚より生ひ出でたる草なればとて。さて美人草とは申し候。

ワキ「さらば項羽高祖の戦ひの様を。御存じ候はゞそと御物語り候へ。

シテ「さらば語つて聞かせ申し候ふべし。

シテ「さても項羽高祖の戦ひ。七十余度に及ぶといへども。始めは項羽打ち勝ち給ひ。一度も高祖の利なかりしに。ある時項羽の兵心変りし。却つて項羽を狭めつゝ。四面に鬨の声をあぐれば。虞氏は思ひに堪へかねて。いかゞはせんと伏し給ふ。又望雲騅と云ふ馬は。一日に千里を駆くる名馬なれども。主の運命尽きぬれば。膝を折つて一足も行かず。其時項羽はちつとも騒がず。馬よりしづく

とおり立つて。如何に呂馬童。我首取つて高祖に捧げ。名を揚げよやと呼ばれども。

地

「呂馬童は恐れて近づかず。不覚なる者の心かな。是見よ後の世に。語り伝へよと言ひあへず。剣を抜いてあへなくも。我と我首を搔き落し。呂馬童に与へ其まゝ。此原の露と消えにけり。望雲騅は膝を折り。黄なる涙を流せば。さのみ語れば我心。昔に帰る身の果。今は包まじ我こそは。項羽が幽

霊頭はれたり。跡弔ひてたび給へ。く。(中人)

ワキ歌

「様々に。弔ふ法の声立てゝ。く。波に浮寐の夜となく。昼とも分かぬ弔ひの。般若の船のおのづから。其纜を説く法の。心を静め声をあげ。一切有情。殺害三界不墮惡趣。

後ジテ

「昔は月卿雲客うち囲み。今は樵歌野田の月。爛体霧深し古松下の陰。

地

「苔紛々として旧名を埋む。

シテ

「紫の雲間よこぎる出立は。

地

「天つ乙女の調べかな。おのく伎樂を奏しつゝ。く。夢の黄楊櫛弾く琴琵琶の。四面に鬨の声を上ぐれば。又執心の攻め来るぞや。あら苦しの苦患やな。

ツレ

「虞氏は思ひに堪へかねて。

地

「虞氏は思ひに堪へかね給ひて。高楼に登りて。落つるはさながら涙の雨の。身を投げ空しくなり給

へば。

シテ「項羽は虞氏が別れと我身の。

地「なり行く草葉の露諸共に。消え果てし悲しさ。思

ひ出づれば。剣も鉾も皆投げ捨てゝ。身を焼くばかりに口惜しかりし。夢物語ぞ哀れなる。

シテ「あはれ苦しき瞋恚の焰。

地「あはれ苦しき瞋恚の焰の。立ち上りつゝ味方を見れば。高祖に属して寄せ来る波の。荒き声々聞け

ば腹立。いで物見せんと自ら駆け出で。敵を近づけ取つては投げ捨て。又は引き伏せ捻首とりぐに。恐ろしかりける勢なれども。運尽きぬれば烏江の野辺の。土中の塵とぞなりにける。